

フィリップ・メランヒトンの絵画・図像論

下山大助(京都大学)

ヨーロッパ宗教改革と図像理論とのかかわりについては、欧米において豊富な研究の蓄積がある。特に、ルター、カルヴァン、ツヴィングリといった改革者たちの図像理論や、同時期の画家・版画家たちが宗教改革に対して示した態度についても、詳しく論究されてきた。ルターの補佐役として重要な役割を果たしたドイツの宗教改革者フィリップ・メランヒトン(Philipp Melanchthon, 1497~1560年)については、E・パノフスキーがその「イデア」観について論じているほか、A・ヴァールブルクがその古代・異教への憧憬、占星術への没頭について詳細な論証をおこなっているが、その視覚芸術に対する態度、ひいてはその絵画・図像論と呼べるものの全体像を明らかにした研究は、今のところ見当たらない。本発表の目的は、1万通近くにのぼるメランヒトンとその友人たちの書簡(ラテン語およびドイツ語)のうち、その絵画・図像に対する態度の徴候を示していると思われるさまざまな具体例を分析し、そこからメランヒトンの絵画・図像論とも呼べるものの再構成を試みることである。

その中で明らかになってくることは、以下の諸点である。第一に、メランヒトンが言語芸術(詩や散文)や弁論術を、しばしば絵画の制作技術や鑑賞方法との類比によって語ることがある点。この絵と弁論術のアナロジーは、あくまでもホラティウス『詩論』の有名な一節を下敷きにしたものではあるが、その表現は複雑化され、時代の芸術的風潮を如実に反映したものとなっている。また、メランヒトンはことあるごとにデューラーの名を挙げてその芸術と精神を賞賛し、その自然観察の厳密さを模範とすべきことを説く。第二に、メランヒトンが自身の見たとする「夢」を語っている書簡が存在するが、しばしば、それが「絵画」を媒介として、あるいは、自身を画家になぞらえるかたちで語られているという点(さらに、そうした「夢」を描いた詩の一つは後にクラナハ(子)によって版画作品へと翻案されている)。第三に、メランヒトンはその「夢」の語りに加え、「架空の絵(像)」を描写しており、それらはいわゆる「エクフランス」を構成しているという点(具体的にメランヒトンは聖クリストフォロスや聖ゲオルギウスの像を描写しつつ、その信仰上の解釈を説いている)。最後に、第四点として、メランヒトンは他の宗教改革者や友人らとの間で絵の贈答を行うなどし、画家・芸術家との交際も活発に行なっていたと思われる点。以上の観察から、メランヒトンにとって、「夢」の表象や言語芸術、より一般的には理性の営み自体が、絵画・視覚芸術の領域と不可分なかたちで結びついていることが示唆されるとともに、これらの結びつきが単なるアナロジーという関係を超えて、信仰の実践としての芸術行為、芸術の実践としての信仰・言語行為という関係として現れてきているさまが見て取れるのである。